

よい文章を書くための15か条 (解説編)

平成15年5月31日発行「補習校だより」第7号より抜粋

文(センテンス)を短くする。

「よい文章」や「簡潔な文章」という意識を持っていない段階では、思い浮かんだことをただ書き連ねてしまいがちです。その結果、次のような「だらだら文」になってしまいます。

「現地校の先生はやさしいけど、宿題をしていかないと書き取りをさせられるから、ぜったいやっていこうと思うけど、ぼくには英語が 難しいので、宿題ができないから……。」

このような「だらだら文」を直すには、傍線部の接続助詞を接続詞に置き換えることです。

……やさしい。けれど、……

……させられる。だから、……

……と思う。だけど、……

それ以前の注意、つまり、「だらだら文」にしないためには、声に出して読み返し、一息で読める長さを目安にすることです。「一息」というのは「一呼吸」ということではなく、一読して分かるということです。低学年児童の書いたものでも、それは「達意」の文章ということになります。

ただし、以上はあくまでも《初級》段階の心得です。というのは、^{センテンス}文が短いことは簡潔な文章の要件の一つではありますが、それ一辺倒がよいわけではないからです。より詳しく、より豊かに述べるため、あるいは、昂揚した気分や複雑な状況を伝えるために言葉を重ねることもあるものです。長い文、短い文の織り成すリズムとともに読者を惹きつけてやまない高いレベルでの「達意」の文章は、「^{センテンス}文を短くする」だけでは叶いません。十五か条の中に「一つの段落では一つのことを述べる」ことを挙げながら、「一文では一つのことを述べる」と言っていないのは、そういうわけです。